

第2章 継承のために参考となる取組事例

委員会では、協議会事業の今後の方向性を探るにあたり、参考となる先進事例の視察や研究を行いました。

結果として、他地域の先進的な取組のみならず、南信州にも各地区等で見習うべき取組事例が数多くあることが確認されました。

これら実際に行われている取組を、今後の協議会の事業展開に活かすと共に、各地区等においても、実情に応じ、担い手確保・育成のために可能なものは取り込み、新たな対策を実践していくことが求められます。

本章では、これらの取組事例の一部を紹介します。

【子どもへの継承・伝承活動】

2-1 大鹿歌舞伎

農村歌舞伎として全国で最初に国の選択無形民俗文化財とされた「大鹿歌舞伎」においては、子どもたちが歌舞伎を通じて地域を学ぶ取組が行われています。

大鹿中学校では、昭和50年から保存会の協力のもと大鹿歌舞伎クラブで中学生が歌舞伎に取り組んでいます。当初は、クラブ活動としてスタートしましたが、生徒の減少もあり、現在は全生徒が3年間にわたり歌舞伎を学び、毎年一回の公演を立派に演じています。

近年では、この活動が小学校にも広がり、4年生が歌舞伎を学び発表会を開催するまでになっています。



大鹿中学校大鹿歌舞伎クラブの活動

地域の民俗芸能を小・中学校の双方で本格的に学ぶ環境があることで、中学卒業後に保存会へ加入する若者も増えており、担い手確保の着実な成果に繋がっています。

地域と中学校、小学校、教育委員会が一体となり民俗芸能を学ぶ取組は、他地区においても大いに参考になるものです。

2-2 伊那の人形芝居（今田人形・黒田人形・早稲田人形）

国選択無形民俗文化財に指定されている「伊那の人形芝居」は、現在4座で伝承されています。このうち、南信州には「今田人形」（飯田市龍江地区）、「黒田人形」（同上郷地区）、「早稲田人形」（阿南町西條地区）の3つがありますが、

これら3地区でも、小・中学校において人形芝居を通じて地域文化を学ぶ取組が行われています。

各中学校においては、保存会などが支援する形で総合学習やクラブ活動で生徒が人形芝居に取り組んでいます。それぞれの地区の定期公演や、いいだ人形劇フェスタをはじめとする外部公演などへ精力的に出演しており、お互いに刺激を受けながら技術向上に努めています。

さらに「今田人形」と「黒田人形」については、小学校においても総合学習を活用した体験学習が行われており、小学校から中学校にかけて人形芝居に触れる機会が提供されています。

少しずつではありますが、子どもの頃に経験した皆さんが入座する流れも生まれており、将来の担い手確保には、やはり子どもの頃に体験する環境を整えることが、効果的であると言えます。

なお、今田人形に取り組む飯田市立竜峡中学校の取組からは、さらに本格的な芸能の世界での活躍を志し、これまでに2名の子どもが文楽の世界に進んだ実績もあります。



2-3 新野の盆踊り・雪祭りほか

大鹿歌舞伎、人形芝居の事例は、地域や保存会の全面的な協力の下、学校教育の枠の中で進める学習活動ですが、阿南町新野地区では、地域や保存会が主体となり地域行事として「郷土芸能こども教室」を開催しています。

新野地区には、国の重要無形民俗文化財である「新野の盆踊り」や「雪祭り」



のほか、「霜月祭」「御鋏祭」「行人様」といった伝統行事があります。このほか、地域の歴史や文化、自然等を学ぶ場として平成24年5月にスタートしました。現在、お祭りや行事の予定に合わせて、年間を通じて20回ほどの教室が開催されています。

実際の祭りで子どもたちが担う場も用意されており、多くの子どもたちが盆踊りの音頭取りや雪祭りの舞や笛の演奏などで活躍しています。

地区全体で子供に体験させる仕組が構築されており、将来の担い手育成の手法として注目されます。

2-4 長野県阿南高等学校郷土芸能同好会

小・中学生が地域の民俗芸能を学ぶ取組は、前述のほか各地で一定の取組がある一方で、中学卒業後に芸能に触れる機会を探すと、その事例は激減します。

そのような中、平成27年2月に長野県阿南高等学校に発足した郷土芸能同好会の取組が注目されます。音楽の授業で取り組んだ泰阜太鼓がきっかけで郷土芸能に興味を持った生徒たちが集まり、県内で唯一となる郷土芸能クラブの活動に発展しました。

平成27年度の会員は9人で、うち4人が阿南町新野地区、2人が飯田市遠山地区の出身です。彼らは、小・中学校の頃から学校や地元で雪祭りや霜月祭を学習し、実際に参加しており、その経験が今回の同好会の結成に繋がっています。

7月には、滋賀県で開催された全国高等学校総合文化祭（公益社団法人全国高等学校文化連盟主催）に郷土芸能部門の長野県代表として出演し、「新野の雪祭り」の芸能を立派に披露しました。以降、多くの関心が寄せられ、地域内外において様々な形で民俗芸能を披露しています。多くの人に見ていた



阿南高等学校郷土芸能同好会
(平成27年度全国高等学校総合文化祭)

だくことが活動の励みとなっており、さらなる活動の拡大が期待されます。

今回彼らが参加した全国高等学校総合文化祭は、平成30年度の長野県での開催が決定しています。これを契機に、より多くの高校生が民俗芸能に触れる機会が創出され、阿南高等学校のような取組が他の高等学校や地域に拡大することを期待するところです。

なお、郷土芸能同好会の会員は、阿南町新野の「霜月祭」「雪祭り」、飯田市の「遠山の霜月祭」に積極的に関わっており、各祭りの後継者として期待されています。

【青壮年層による継承活動】

2-5 遠山の霜月祭

当地域の年齢別人口構成（P 6 図表 1-3-1）では、多くの若者が高等学校卒業後の進学や就職などで県外へ転出する影響で、10代後半から30代前半の割合が極端に低い状況です。

さらに、生活環境や価値観の多様化もあり、民俗芸能に参加する青壮年層が少なくなっており、この世代を如何に民俗芸能に引き込んでいくかが大きな課題です。

そんな中、注目されるのが飯田市南信濃地区の「木沢霜月祭野郎会」の取組です。少子高齢化の影響で、「霜月祭」の技能の伝承に危機感を覚えた若者たちが自ら集まり、平成26年1月から活動をスタートしました。出身者や会の趣旨に賛同した高校生から40代まで30名程のメンバーを中心に、木沢地区で開催される3社の「霜月祭」へ参加しています。

彼らの参加が各地区の祭りに活気をもたらし、今後さらに住民との交流が進めば、多くの担い手の育成に繋がるものと期待されます。



木沢霜月祭野郎会による活動

2-6 横尾歌舞伎（静岡県浜松市）

青壮年層の参加促進の事例としては、静岡県浜松市北区引佐町横尾・白岩地区の「横尾歌舞伎」の取組があります。

横尾歌舞伎は地域住民が約200年間伝承している農村歌舞伎で、地区住民のほとんどの世帯が関わる形で支えています。若い世代の参加が少なく、継承が課題となっていました。



横尾歌舞伎
（計画的な役者育成を实践）

そこで保存会では、近年、青壮年層の育成を計画的に進めるための取組を精力的に展開しています。1年目に脇役、2年目に主役を勤め、3年目は後輩の指導役となり、この3年間で一通りの経験を積み、一人前の役者として育てるという

ものです。若い世代への勧誘も積極的に行い、毎年新たに4人程の人材確保を実現しています。

最近では、若い世代が自分達の希望する演目を保存会に対し提案するなど積極的に歌舞伎に関わるようになり、保存会全体の意欲高揚に繋がっています。

横尾歌舞伎では、このほかにも歌舞伎少年団や少年少女三味線教室による子ども歌舞伎の公演や、伝承のために最新の技術を活用して役者の動きや所作を記録するなど、先進的な取組が行われており、これらの取組はいずれも南信州の民俗芸能の継承にも大いに参考となるものです。

【外部からの支援受入】

2-7 天龍村の霜月神楽

(坂部の冬祭り・向方のお潔め祭り・大河内の池大神社例祭)

国の重要無形民俗文化財の「天龍村の霜月神楽」は、いずれも山間地の小集落（坂部地区・向方地区・大河内地区）に伝承される民俗芸能です。いずれの地区も少子高齢化が進み住民の多くが65歳以上のため、現居住者のみでは祭りはもとより、その他の各種年中行事の実施やコミュニティの維持も危ぶまれる状況の中、それぞれが実情に応じた取組を行っています。

まず、坂部地区が取り組んだのは、地区出身者などへの葉書等による参加の呼びかけです。「坂部の冬祭り」をはじめ行事の多くは神事であるため、従来は、地区の神子（かみこ）のみで行っていましたが、人手不足のため、現在は参加範囲を地区外に暮らす子や孫へ拡大し、地区外居住者も祭りの



の担い手として受け入れています。さらに、平成27年の冬祭りからは、新たに天龍村の地域おこし協力隊員1名を神子として受け入れました。また、地域おこし協力隊のネットワークや地域学習で坂部を訪れた学生などにも輪が広がり、若者たちが祭りを体験しながら可能な範囲で運営を後方支援する活動なども始まっています。

次に、向方地区では、地区内で学校法人が運営する「どんぐり向方学園」の存在が大きくなっています。同校は、廃校となった旧向方小・中学校の校舎を活用し、不登校の生徒などを受け入れる形で平成17年に小・中学校がスター



向方のお潔め祭り
(どんぐり向方学園が参加)

トし、平成 20 年には通信制の高等学校も設置されました。開校から 10 年が経過する中で、地区住民と児童生徒や職員の皆さんとの交流や地域行事への参加も活発に行われるようになり、「向方のお潔め祭り」にも先生方を中心に積極的に参加しています。将来的には、向方を第二の「ふるさと」とする学園

の卒業生が、担い手として活躍することにも期待が広がります。

最後に、大河内地区では、芸能集団「田楽座」との交流が大きな力となっています。「田楽座」は、伊那市を拠点に昭和 39 年から 50 年活動する歌舞劇団で、日本に昔から伝わり、人々の生活の中で生きてきた唄、踊り、太鼓や舞などの民俗芸能を今に伝える集団です。大河内地区では、約 30 年前からこの「田楽座」との交流を続けており、お互いに芸能や舞を学び、支援する関係が構築されました。「大河内の池大神社例祭」には、毎年 10 名程の劇団関係者が手弁当で訪れ、祭りの側面支援をしているほか、一部の団員は、宮人（みょうど）として本祭で舞にも参加しています。いわゆる芸能のプロ集団の支援を受ける形で伝統を受け継ぐという他に例のない希少な事例といえます。



大河内の池大神社例祭
(芸能劇団関係者が支援)

地元には人材がいないうちで、可能な範囲で参加条件を緩和し、人材を外に求めてきたこれら天龍村各地の手法は、他の芸能においても未来へ継承するための方策として大変参考となる取組です。

2-8 上村中郷の霜月祭

人材を外に求める手法として、公募による担い手募集の取組があります。

「遠山の霜月祭」を行っている上村中郷地区でも、平成 23 年から、担い手不足を補うため、公募により祭りの参加者を募集する取組を進めています。「霜月祭」に参加してみたいという人材を募集し、練習から本番まで通しで参加し

てもらふものです。

これまで、開始時に応募した数名のうちの2名が継続して参加しているほか、平成27年は新たに3名の応募者が練習から本祭まで精力的に参加し、地元の皆さんとともに祭の盛り上げに一役を担いました。

こうした外部からの参加希望は多くはないものの、希望者を発掘し交流を継続していけば、側面支援はもちろん将来の担い手として育っていくことも大いに期待されます。



2-9 御園の花祭り(愛知県東栄町)

愛知県奥三河に伝承されている国の重要無形民俗文化財「花祭り」は、南信州と地理的にも近いこともあり、南信州の霜月祭と共通点の多い祭りです。11月から3月にかけて東栄町、豊根村、設楽町の各地区で行われていますが、やはり少子高齢化・人口減少の影響で、存続が課題となっています。その中で、東栄町御園地区では都市部との交流による相互支援関係が構築され、大きな継承の力になっています。

約30年前に始まった交流が縁で、御園の皆さんの支援により昭和62年に東京都東久留米市で「第1回東京花祭り」が開催されました。以降、相互に互いのお祭りを支援する関係が構築され、東京花祭りの皆さんも年間数回にわたり御園地区を訪れ、練習参加や祭の支援を行っています。祭りの人手が不足する中、東久留米の皆さんの参加・支援が大きな力になっています。



また、御園地区では、継承活動を積極的に推進するため、地域住民が主体の「NPO法人御園夢村興し隊」を立ち上げ、廃校となった小学校の校舎を活用した展示施設「花まつりの館」を開設し、入場料収入を得るなど、多くの先進的な取組が進められています。

2-10 竹富島の種子取祭（沖縄県竹富町）

沖縄県八重山諸島の竹富島には「種子取祭」という国の重要無形民俗文化財があります。やはり課題は人口減少。戦後、多くの住民が生活の場を求めて沖縄本島や都会へ転出してしまい、芸能披露に延べ500人が必要とされる祭りを住民のみでは開催できない危機的な状況がかつてありました。

そこで、隣島の石垣島に居住する島出身で組織する「石垣竹富郷友会」へ支援を求めたところ、愛郷心に富む多くの出身者が参加するようになりました。その後、「沖縄竹富郷友会」、さらに昭和52年の重要無形民俗文化財の指定を契機に「東京竹富郷友会」へとサポートの輪が広がり、現在に至っています。今では、祭りが行われる9～10月は、小さな離島に各地の郷友会やその関係者、観光客など多くの方々が押し寄せる一大行事となっています。

一方で、近年では、これら郷友会などの支援者と地元住民との意識のズレや、



さらに伝統や芸能の真意を理解しない2世、3世の参加などの課題も指摘されています。

こういった意識の差を埋める取組が必要となりますが、出身者による外部からの組織的支援は、継承を考える上で大変重要な手法と考えます。

【継承のための組織の構築】

2-11 壬生の花田植（広島県北広島町）

国の重要無形民俗文化財「壬生の花田植」は、平成23年にユネスコの無形文化遺産に掲載されたことで世界的に注目されています。

芸能の公演に当たっては、出演団体（田楽団）と別に公演等の行事をサポートする保存会を組織し、地域住民全体で支援する体制となっています。実演団体とは別に、後方支援を行うための組織は、南信州でも大鹿歌舞伎や人形芝居などで行われていますが、「壬生の花田植」では平成26年2月にNPO法人化し、保存・継承と地域振興策としての活用を更に進める取組を行っています。NPO組織の立ち上げ事例は「御園の花祭り」（P16）にも紹介しましたが、そのメリットとしては、保存会の活動が第三者にも見え易くなり活動への理解

が広がること、その結果として資金援助を受けやすくなること、さらに新たな活動展開が図れることです。加えて何よりも参加者自身の継承意識がこれまで以上に高揚させることに繋がると考えます。

また、北広島町では、ユネスコの世界文化遺産への掲載を受け、

「壬生の花田植」の呼称を一部の者が独占する事態を防止する側面に加え、地域ブランドとして活用を図るために商標登録を行いました。併せて地元企業がこの商標を利用した商品を販売することで、保存会へ寄付金が入る仕組みも導入し、民間企業による支援も取り込んでいます。

これらNPO組織による取組や商標による資金確保の仕組みは、共に導入可能な手法であり、南信州でも検討に値するものと考えます。



2-12 浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会（静岡県浜松市）

浜松市は、平成17年7月に平成の大合併により旧浜松市ほか12市町村が合併し、新生浜松市としてスタートしました。合併により浜松市は東西52km、南北73kmの広大な面積を持つこととなり、旧浜松市にはなかった「ひよんどり」や「おくない」、「田楽」、「農村歌舞伎」など多くの貴重な民俗芸能を伝承する地域を抱えることとなりました。

この合併を機に、民俗芸能を「浜松市の宝」と位置づける気運が高まり、芸能団体がお互いに集い、交流する場として平成25年に発足したのが「浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会」です。

現在、19の芸能団体や保存会が参加し、お互いの課題などの情報交換や相互支援を行うほか、会報発行も行っています。



注目すべきは、当該連絡会は行政主導ではなく、各芸能団体の皆さんの課題意識の高まりにより、団体の皆さんの声掛けにより住民主導で設立されたという点です。実際の活動についても団体主導で行われて

おり、浜松市はあくまで側面支援を行っているのみです。

今後の組織や活動のあり方を長い目で考えるとき、将来的に住民主体の事業展開を視野に考えていくことも必要ではないかと考えます。

【事例研究の成果と課題】

ここに掲げた事例は、数多ある取組の一部であり、その他の地区等における同様の取組やここに掲げていない取組もまだ多くあろうかと思えます。

今回、多くの地区等において担い手の不足や不在という共通の課題を抱える中、実情に応じた様々な取組が実践されている現状を把握することができました。これまで、これらの事例を広く集めて情報共有する場や機会はありませんでしたが、協議会、委員会の活動によりこれらを収集し、ここに一定程度紹介できたことは、大きな成果であると言えます。

なお、これらの事例の多くでは、課題に真摯に向き合い、熱意を持って取り組むリーダーや鍵となる人材の存在が大きいことにも触れておきたいと思えます。

一方で、人材がいない中で特に外部支援を求めた事例においては、受け入れる側と参加する側との意識や認識の違いによる課題も指摘されています。民俗芸能は古くから伝承される過程で変遷してきており、今後も変化していくことは自然の成り行きですが、そこに流れる本質は守っていかねばなりません。受け入れる側は、外の人間に対して、どこまで開放し、変化をどこまで許容していくのか、また、譲れない部分はどこなのかを明確にし、参加する側は、その歴史や伝統、謂れや所作の持つ真意に至るまで十分に理解し、それを尊重する意識が必要です。民俗芸能に受け継がれる本質を違えないためのお互いの努力が求められます。